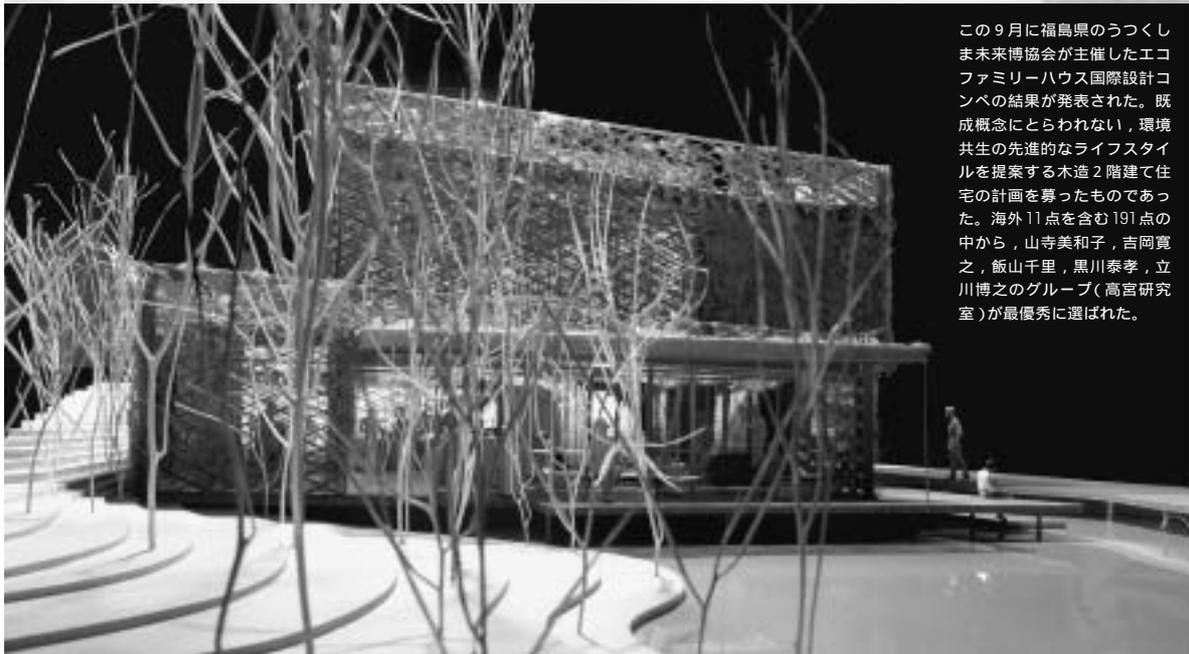


SYUNKEN

駿建

2000.11 Vol.28 No.3 秋期号
日本大学理工学部 建築学科
日本大学短期大学部 建設学科



この9月に福島県のうつくしま未来博協会が主催したエコファミリーハウス国際設計コンペの結果が発表された。既成概念にとらわれない、環境共生の先進的なライフスタイルを提案する木造2階建て住宅の計画を募ったものであった。海外11点を含む191点の中から、山寺美和子、吉岡寛之、飯山千里、黒川泰孝、立川博之のグループ(高宮研究室)が最優秀に選ばれた。

エコファミリーハウス 国際設計コンペ 最優秀賞を受賞して

高宮研究室 M2 山寺美和子 吉岡寛之
M1 飯山千里 黒川泰孝 立川博之



このコンペは2001年に福島で開催されるジャパンエキスポ「うつくしま未来博」において、そのテーマ施設「エコファミリーパーク」内に建設されるエコファミリーハウスを計画するもので、環境共生住宅という既成概念の殻を破る独創的な設計が要求されました。私達はテーマをHOUSE e+E -場の共有が生み出すエコライフスタイル-として、建物のシステムと形態によるライフスタイルの示唆を総合的に提案しました。第1次審査(2000年7月)、第2次審査(2000年9月)を経て、全191件の応募の中で、最優秀賞をいただくこととなりました。本作品は、上記エキスポでの展示とともに、2001年7月までに建設を完了し、一般公開される予定となっています。

エコライフスタイルは、生活環境という部分で多少の我慢が前提となっていることが多いが、この案は人と自然、人と人との関係において、さらなる快適性を求めるものとなっています。また、ソフトとハードに対する提案を深く結びつけて考えることも重要な点であり、両者がお互いをひきたてて初めて充実したものになると確信しています。こうしたことを追求した結果が、

今回の最優秀賞につながったと思います。

アイデアを具体化させていく過程は、たとえ睡眠不足になっても、本当に楽しく達成感のあるものでした。

(M2 山寺)

コンペだからといって特異なアイデアも大事だけれど、普段見落としがちなことから何かを発見してアイデアを

出すことも大切だと思う。みんなで本音で話し合いながら、思いがけないものが完成した時は楽しかった。一等とれて、本当によかった。ハッピー、ハッピー。

(M2 吉岡)

このコンペに参加して最もよかったと思うことは、みんなの考えを発展させていくプロセスを体験できたことです。初めて実施に近いものに取り組ん

ビオトープには観察するといろんな発見があるんだ。僕たちが大人になっても残ってるよな。きっと。

雨降は虫が人にいる場所。友達がおせ口に夢中になってるすきに...

僕らはお風呂もプール感覚！楽しくて次の目的にもなるんだって。

食べる時間がバラバラだと何となくももしてエネルギーもたくさん必要！1箇所で一緒に楽しく食べよう！

緑に囲まれて楽しくお食事。

緑大な自然に囲まれて今夜はゆっくり話そうね。

夜更かしはエネルギーがもったいない！みんなで同じ時間に寝た方がエコだね。

HOUSE

エコファミリーハウス 国際設計コンペ

1. テーマ

HOUSE e+E -場の共有が生み出すエコライフスタイル-

2. 設計コンセプト

エコロジーに対する解答を建物のシステムに求めるのではなく、共有から生まれる人とのつながりを重視することで新たなエコライフスタイルを提案する。家族が密接に生活を共有することで生まれる小さな気配りは、それぞれの生活サイクルを重ね合わせてゆくとともに、エネルギーの消費を減らし、家族だけでなく地域の人々と生活の一部を共有することでも、広範囲に渡り重複したエネルギー消費を軽減することとなる。こうした集団生活による、トータルなエネルギー負荷の減少を目指した快適な住空間を実現し、自然エネルギーを最大限に活かすパッシブシステムをそこに付加することで、新たなエコロジカルハウスが完成する。家族を超えた生活スタイルは、エネルギーの点だけでなく、豊かなコミュニケーションを生み出す上でも、重要なこと。ここで生じた空間で、人とのつながり、そして光、風、水、生命といった自然の恵みの大切さを人々は感じる。

3. コミュニケーションに対する提案は何か？ (人と自然、人と人)

-人と自然-

自然にたまたま見るだけのものではなく共に生きものである。普段は緑化された格子(木)に囲まれて生活を送っているが、部分的に格子(木)を開き(コア)として機能させると、1階全体が一体となり自然に対して解放される。外部と内部、自然と住まいを連続させることで、ビオトープからの風、パーゴラを通しての木漏れ日、様々な生命の息吹を感じながら、人々は集り、自然への認識を深めていく。(図1)

-人と人-

個人の特性を取り出し人と人のふれ合いを大切にすると、人間にとって絶対に根本的なことを見直す必要に迫られるのではなく、だろが、それは家族に始まり、地域の人々へと広がっていく。これらの集合体が、今までになく密接にダイナミックにリンクする。居住空間は、家族の場となるspace-eと家族と地域住民の共有の場となるspace-Eの連続した2つの空間で構成され、こうした新しい共同生活が思いやりと心を含み、連帯感を生む。

4. 新しいライフスタイルの提案は何か？

未来のライフスタイルとして「共有すること」を提案する。本来の人間はコミュニケーションを取るとともに、物、時間、場所を、家族や地域の人々と共有しながら消費活動を減らしていく。スリット状のspace-eで個室を設けず、ライオンに合わせた折れ曲がりの天井と床高の変化する空間を使い分け、家族が目的に合わせて折れ曲がった天井の同一空間で日常生活を営み、お互いの気配を感じることで小さな気配りが生まれ、生活サイクルを合わせるコアライフを生み出す。またspace-eに繋がる下層部のspace-Eは、家族のためだけの空間ではなく地域の人々へ開放されることで、小さな交流センターへと変化する。例えばエコキング教室で自然の恵みに感謝したり、雨水利用で蓄められた大浴場でしゃべり仲間たり、エコライフ地域全体で考え、時間を共にすることでトータルエネルギー負荷の減少を目指す。(図2)

図1

パーゴラ：開格子パネルを構造的状態、空間低さを利用し、微気候を作り出す。

図2

居室

家族の場

私的な空間

家族の場

開放される空間

地域社会



なのですが、「実際に建つ」と想像することがとてもワクワクして刺激的でした。みなさんも見に来てね

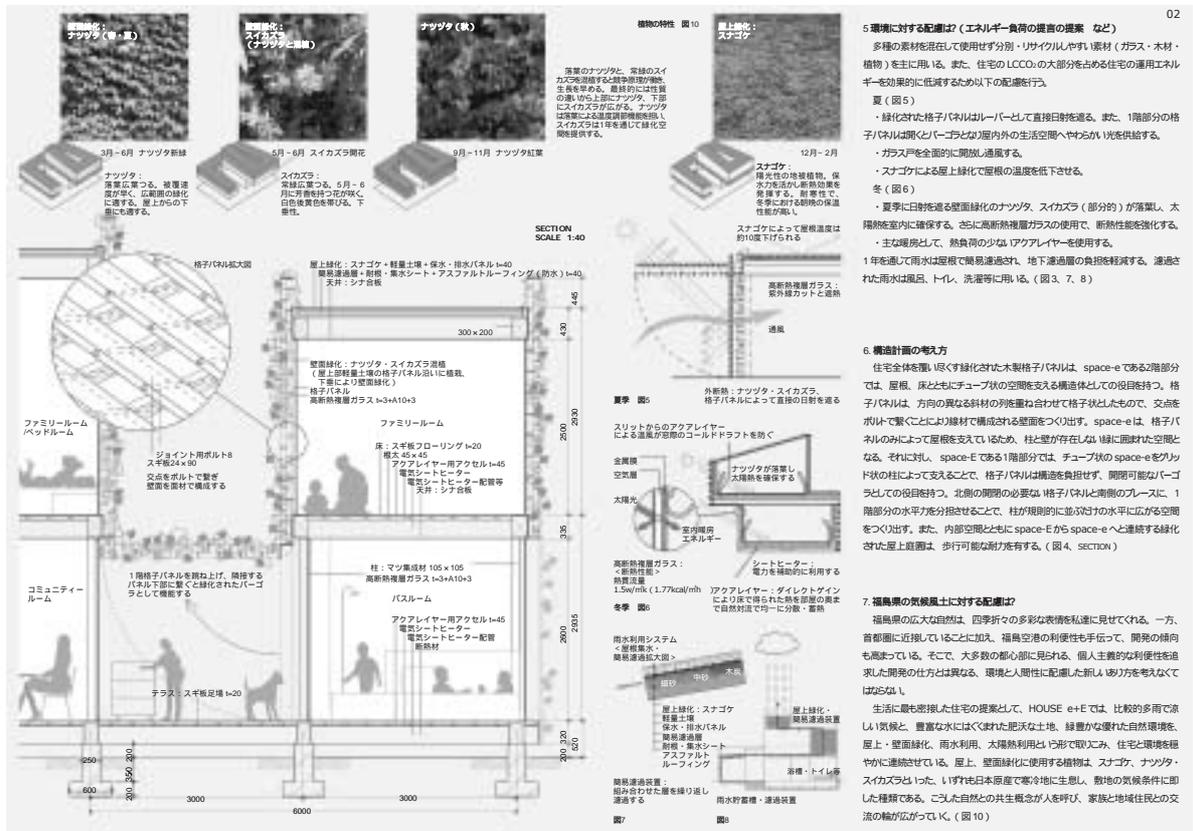
(M1 飯山)

1人の興味の及ぶ範囲よりも、5人のほうが、はるかにひろいし、こだわるところだって、各々全然違う。人がたくさん集まると、それだけ？が多くなるけれど、！も多くなる。(M1 黒川)

この作品は、シンプルに見えて複雑、というところが評価の一つにあるようです。そりゃ5人で考えてるんだから複雑なのは当たり前です。それをシンプルな形に落とすというのが、個人的にはグループで設計をする時には一番難しいことだと思うんですけど、たまたま今回はそれができちゃったという感じです。なんでできたのか。それがわかったら、これからは苦労しなくて

もいいのになあって思います。もうちょっとの間、素直に喜んでから考えてみようと思います。(M1 立川)

最後に、いろいろアドバイスをくださった高宮先生、佐藤先生、斎藤研の岡田先生、宮里さん、本杉研の安さん、たくさん模型材料とコンピュータを使える研究室に感謝したいと思います。





中原英隆「C' mon sense」展 開催 建築学科4年(今村研究室)

自由な感性をもって独自の創作活動を展開するインディーズ・クリエイターを一堂に紹介するSICF(スパイラル・インディペンデント・クリエイターズ・フェスティバル、主催：(株)ワコールアートセンター)で、本年4月、中原英隆君(建築学科4年、今村研)が第1回SICFグランプリを受賞した。これを顕彰して、「第1回SICFグランプリ作品発表展覧会 中原英隆「C' mon sense」展」が、去る11月1日から5日まで、南青山のスパイラル1階ショールームで開催された。

4月に行われた第1回SICFの中原ブースにはトイレトペーパーが積み上げられ、その中を覗くと白い便器と黄色いアクリル製の椅子が置かれて、そこがプレゼンテーションの場となっていた。中原君のプレゼンテーションファイルは、カラフルなチューブで作られた椅子、収納家具などのプロダクトデザインを美しいCGで表現したものであった。審査員は「プレゼンテーションしかなかったけれども、豊かな可能性が感じられた。完成されたものを見てみたい」とコメントを寄せた。中原君は、「ぼくにとって初めてのプレゼンテーションでした。それまでためてきたプロダクトデザインのアイデアはあったけど、ぼくにはまだそれを形にする技術も手段もない。だから割り切ってプレゼンだけに見てみたんです。与えられたブースの大きさがトイレの空間にとっても近かったの、トイレトペーパーを使ってディスプレイすることを思いついたんです」という。

11月に行われた「中原英隆「C' mon sense」展」では、先に示されたプレゼンテーションのなかのひ

とつ、「un(カップ・キャップ)」が、具体的な「形」になって展示された。ここで発表された「un」は、コーヒーカップとソーサーに小さな小さなライトを組み込んだ作品で、コーヒーを飲み終えたあと、カップを伏せれば、ふわりとした光を放つ「テーブルライト」になるというものである。日ごろ見慣れたコーヒーカップから、柔らかな明かりがこぼれて、日常の動作のなかに思いもよらない感覚を引き出している。

再び中原君の話 「ぼくはコーヒーが好きで家でもよく飲みます。でもすぐ片づけるのってつまらない。もっと余韻を楽しみたい。そこで、飲み終わったカップをひっくり返してランプになるといいなと。すぐに片づけなくては、という強迫観念から開放されるし、収納が必要なくなるかもしれない……」。

食器や家具、そして電気製品のプラグなど、日々使用するモノに、ウイットや皮肉を含ませたライトやゲームなど、動きのある機能をプラスしているのが中原作品の特徴である。今後の発展と活躍が期待される。

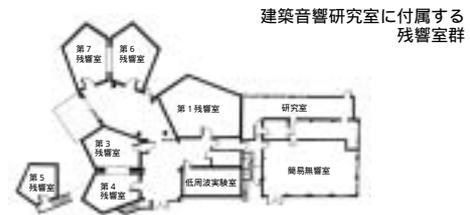
なお、SICF事務局では第2回SICFの参加者を募集中である。受付期間は12月1日(金)~2001年1月31日(水)、当日消印有効。フェスティバルの開催は2001年4月6日(金)~8日(日)、11:00~20:00。

スパイラルホール：東京都港区南青山5-6-23
問い合わせ先：SICF事務局 Tel:03-3498-1171
Spiral web：http://www.spiral.co.jp/



私の音と建築

吉村 純一



私の勤務する財団法人小林理理学研究所は、昭和15年設立の文部省管轄の研究所で、本年8月創立60周年を迎えた。基礎および応用物理学の研究所として発足したが、戦後は研究の中心を音響学におくようになり現在に至っている。総勢30名ほどの騒音振動あるいは建築音響の研究所よりは、途中設立した補聴器や騒音計でおなじみとなったリオン株式会社（旧小林理研製作所）のほうが一般への知名度は遙かに高い。

私が音（決して音楽ではない）に興味を持つようになったのは、中学・高校生の頃のステレオ、ハイファイ、オーディオブームの頃で、豪華なセットを手に入れられなかった私は、FMラジオの音質の良さに感動したのを覚えている。以来、音を創る、音を記録するといった工学的というよりは感性の領域になるのかもしれないが、音楽的才能のまったくない私は、スタジオミキサーに憧れてみたりしていた。その頃は数学・理科が嫌いなほうではなかったもので、やはり電気・電子学科から音響分野に進むことを目指した。

たまたま父親が設計事務所に勤務していたことで、子供の頃から建築の話は聞かされていたが、激務と虚栄に多少反発を感じ、またアートな感性を持ち合わせない自分が、建築学科に入学しようとは予想もしなかった。その頃の理工系の学科では建築が花形、友人に建築学科を志望するものも多かった。受かる当てのない現役受験では憧れに近づけず電気・電子学科を志望したが、浪人受験では身近で教われるほうが便利、とあっさり鞍替えしてしまったのだ。このときの安易で崇高な願望は、無遅刻無欠席で習志野まで通った1学年はまだしも、お茶の水の雀荘が教室になる頃にはすっかり色あせてしまっていたようである。私限りでつぶしてしまったデザイン研究会の先輩からも、おまえは設計向きではないといわれ続け、設計製図の成績はむしろよいほうであったと言い訳もしたいが、建築設計をあきらめることにさほど抵抗はなかった。

今風にいう音つながりで、木村研究室（木村翔教授）にお世話になるようになったのは3年生の春頃からである。先輩の卒研を手伝い、騒音測定に連れて行ってもらったりで、趣味となってしまう音（楽）鑑賞の知識も多少役立つことがあった。学部4年、大学院の計3年間、一貫してホール音響をテーマとし、木村、関口の両先生の指導を受

けたが、後半、その頃盛んであったホールの音響模型実験に用いる吸音材料を開発することが、私のテーマとなった。音響材料の研究は氏の博士論文の主題でもあり、私の現在のテーマでもある。

第一次オイルショックの折、学部卒業時には山と積まれた就職案内も2年間の修士課程修了後には1通のパンフレットすら送られてこない。親のつてを期待することも考えたが、やはり研究所がいい。音響関係の本では必ず目にする小林理研に、吸音材料の研究をされている子安先生を訪ねることとなった。後に何うにご多分に漏れず小林理研の財政面で最も厳しい折、無給の研修生として入所が許可された。就職難とはいえ建築で仕事に就き、建築を語る友人に対し、大学院まででたのに音響で飯が食えない自分が惨めでならなかった。

幸い1年で正式な所員となることができ、騒音振動研究室で騒音予測や防音技術の研究に携わることができるようになり、その後、音響材料研究室、建築音響研究室と少なからず音響および建築を生かせる職場に恵まれている。目立った研究業績はないものの、一つのことを長年検討してきたことで、木村先生のご尽力により「ガラスの音響透過損失」といった、おおよそ建築と直接結びつかないことで一昨年学位を授与された。

海外では、大学の建築学科はいわゆる建築家（architect）を養成する学科であって、建築あるいは建設工学的要素は少ない。実務やISOの委員会で接する音響関係の友人のほとんどが物理学科卒で、建築的な広範でアバウトで実務的なニュアンスを理解してもらえないことに閉口することもしばしばである。今後も建築分野の音、音響分野の建築といった、それぞれの分野でのこだわりを通じて、自分を主張すべきであると考えている。

私と建築といった命題に対し、私のたどった道のりからその関わりを述べたが、今後の自分の方向を考えなければならぬ学生諸君の参考となれば幸いである。

筆者略歴

吉村純一（よしむら じゅんいち）

1950年 東京生まれ
1974年 日本大学理工学部建築学科卒業
財団法人 小林理理学研究所勤務
1998年 工学博士
2000年 日本大学理工学部非常勤講師

2000年度 日本建築学会大会(東北) 建築学科教室関係者発表論文リスト

2000年度日本建築学会大会がさる9月8日(金)~10日(日)の3日間、郡山市の日本大学工学部キャンパスを主会場にして行われた。学術講演題数は6,131題、3日間で延べ2万人の市民、建築関係者、学生等が参加した。一度にこれだけの参加者が集まると郡山市内のホテルだけでは収容不可能で、ひそかな鬱憤を披露すると某編集委員などは猪苗代山中のホテルを割り当てられ、工学部の会場まで電車とタクシーを乗り継いで毎日片道1時間30分余りをかけて通わされたという。

各部門別の学術講演題数の内訳をみると、構造と環境工学で全体の半数以上を占めたほか、トルコ・コジャエリ・ブル大震災調査の特別報告会、総合研究協議会「地震被災危険度の評価およびその公開を前提とした防災対

策のあり方について」、「阪神・淡路大震災調査報告」全26巻完結懇談会などが参加者の注目を集めた。

井上勝夫教授の建築学会賞受賞記念講演は9月9日(土)午後に行われた。また、野村研究室、村松直美君(現:東京工業大学大学院)の卒業論文「老人保健施設における入所者の生活行動に関する研究 基本的生活行動特性と新築移転における心身への影響」が受賞した優秀卒業論文賞および優秀修士論文賞表彰式は9月8日(金)夕刻に、大会懇親会と同じ会場のホテルハマトで行われた。

例年のように大会学術講演会の中から、教室の先生方、大学院生の関連論文をピックアップして部門別に示した。各研究室の研究動向を知る手がかりとして、卒業研究着手の参考にするとうい。(編集委員会)

印 発表者 *印 ポスターセッション

材料施工・防火

- 1146 南極昭和基地居住棟の耐久性 南極昭和基地居住棟の実大構造ユニットに関する実験的研究 その3
斎藤俊一(日本大)・平山善吉
- 1410 コンクリートの吸水性状に基づく品質の評価に関する実験的研究 その1 コンクリートの吸水試験方法
河辺 京(日本大大学院)・許 永東・清水五郎
- 1411 コンクリートの吸水性状に基づく品質の評価に関する実験的研究 その2 コンクリートの調合・強度の推定
許 永東(日本大大学院)・河辺 京・清水五郎
- 1412 各種コンクリートの圧縮応力 塑性変形関係に関する実験的研究
渡部 憲(東急建設技研)・白井伸明・大岡督尚・森泉和人

構造

- 20222 重複固有値を有する系のモード解析法について 吉田明義(日本大大学院)・石丸辰治・大庭 章
- 20232 戸建住宅を対象とした基礎・地盤の性能評価の考え方(その1 住宅の沈下障害と基礎選定フロー)
田村昌仁(建設省建築研)・藤井 衛・安達俊夫・伊奈 潔・橋本光則・根本 恒
- 20247 静的締固め砂杭の造成時反力と荷重度~沈下量曲線 中野健二(不動建設)・大西智晴・安達俊夫
- 20248 締固め砂杭により改良した砂質地盤の土槽載荷実験(その1 実験結果と考察)
幡野祐輔(日本大大学院)・安達俊夫・小林東世雄・中野健二・吉富宏紀
- 20486 実大テンション構造用粘弾性制振ダンパーに関する実験的、解析的研究
中村博志(新日本製鐵)・竹内 徹・金田勝徳・和田 章・岡田 章・斎藤公男

- 20502 ガラスの構造化に関する基礎的研究(その1) 研究背景およびドームへの適用について
中原英子(オーヴァラップアンドパートナーズ)・斎藤公男・岡田 章
- 20503 ガラスの構造化に関する基礎的研究(その2) 面内軸力を受けるガラスパネルの力学性状について
鈴木 健(日本大)・斎藤公男・岡田 章・中原英子
- 20504 挟み込み式ガラス点支持構法に関する研究 ガラスパネルの力学特性と構造計画手法について
今村柳輔(金箱構造設計事務所)・斎藤公男・岡田 章
- 20508 大規模ガラスファサードに用いるケーブルガーダーの施工計画に関する基礎的研究 さいたまスーパーアリーナのガラスファサードの施工時挙動
山川慶二郎(大成建設)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也・小堀 徹・細澤 治
- 20513 張弦樹木構造の基本的力学特性に関する研究(その1) Suspen-Tree Str.におけるストリングの役割とPS効果について
金子みゆき(中田捷夫研究室)・斎藤公男・岡田 章
- 20514 張弦樹木構造の基本的力学特性に関する研究(その2) 単一ユニットの振り挙動とユニット連結の効果について
塙 祐子(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・金子みゆき
- 20515 Tensegrity Unitの構造物への応用に関する基礎的研究(その1) 1 Unitの基本性状および完成時の応力について
宮里直也(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章
- 20516 Tensegrity Unitの構造物への応用に関する基礎的研究(その2) 自重がPS導入量に及ぼす影響およびmulti-unitへの展開
知久大輔(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也
- 20517 Tensegric Truss Arch (Type)の構造特性に関する研究(その1) 導入PS量が静的特性に及ぼす影響
鈴木 実(神鋼鋼線工業)・斎藤公男・岡田 章・田畑博章
- 20518 Tensegric Truss Arch (Type)の構造特性に関する研究(その2) 導入PS量が風荷重の動的特性に及ぼす影響
田畑博章(大林組)・斎藤公男・岡田 章・鈴木 実
- 20519 Tensegric Truss Arch (Type)の構造特性に関する研究(その3) PS導入方法の提案および実験的検討
岡田秀治(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・田畑博章・鈴木 実
- 20521 ストリング内蔵型スペースフレームの構造特性に関する基礎的研究(その1) PS導入方法の提案および実験的検討
鈴木幹彦(松本市役所)・斎藤公男・岡田 章・田畑博章
- 20522 ストリング内蔵型スペースフレームの構造特性に関する基礎的研究(その2) 建方方法の影響およびヴォールト形状への適用性について
星野雅大(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・田畑博章・鈴木幹彦
- 20529 埋込型テンションセンサーの適用性に関する実験的研究
小藤輝正(横河工事)・斎藤公男・岡田 章・清水利道・塙 祐子
- 20533 ばねストラット式張力膜構造に関する基礎的研究(その1) システムの提案と十字型膜を用いた実験的検討
浦 映二(日本大大学院)・斎藤公男・黒木三夫・岡田 章・鷹羽直樹
- 20534 ばねストラット式張力膜構造に関する基礎的研究(その2) ストラット式張力膜によるばね効果の検討
鷹羽直樹(清水建設)・斎藤公男・黒木三夫・岡田 章
- 20535 初期高張力導入膜に関する実験的研究(その1) 初期曲面形成方法の提案
高田雄一(日本大大学院)・斎藤公男・黒木三夫・浦 映二
- 20536 初期高張力導入膜に関する実験的研究(その2) 施工時および付加荷重時の力学性状の把握
竹内一博(日本大)・斎藤公男・黒木三夫・浦 映二
- 20544 張力膜の応力 ひずみ曲線のモデル化に関する提案 載荷・除荷後の応力弛緩と張力再導入
中島 肇(清水建設)・斎藤公男
- 21192 杭応力に着目した杭支持建物の地震応答シミュレーション解析
大島快仁(不動建設)・林田敏弘・下村幸男・安達 洋
- 21197 隣接構造物の影響を考慮した実大杭基礎モデルの加振シミュレーション解析
近藤龍児(日本大大学院)・大島快仁・下村幸男・安達 洋・中西三和
- 21258 周波数依存性の強い系の簡易時刻歴応答計算法に関する一考察
池田能夫(大成建設)・下村幸男
- 21521 螺旋型ワイヤ・ロープ・デバイスに関する実験的研究 その1 静的力学性能
吉田泰光(日本大大学院)・新谷隆弘・石丸辰治
- 21523 増幅機構を用いた制震構造システムに関する基礎的研究(その7 補助質量付き鋭角型トグル機構の振動実験)
長塚典和(飛鳥建設技研)・石丸辰治・中川三夫・宮永英彦・山本昌士・久保田雅春
- 21536 増幅機構を用いた制震構造システムに関する基礎的研究(その6 実大振動実験によるトグル制震装置の制震性能)
秦 一平(飛鳥建設技研)・石丸辰治・久保田雅春・中川三夫・前川康雄
- 21544 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験(. PCCV耐震実証試験) その14 ライナの負担せん断力と変形能
関本 恒(三菱重工業高砂研)・佐藤邦彦・近藤 誠・服部 靖・秋山 宏・瀧口克己

- 21545 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験（ . PCCV耐震実証試験） その15 復元力特性の簡易的評価手法
竹内義高（大林組）・津田和明・服部 靖・佐藤邦彦・秋山 宏・瀧口克己
- 21546 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験（ . PCCV耐震実証試験） その16 耐震裕度の検討
中村 進（原子力発電技術機構）・江戸宏彰・服部 靖・佐藤邦彦・秋山 宏・瀧口克己
- 21547 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験（ . PCCV耐震実証試験） その13 試験計画と結果概要
鶴巻静雄（原子力発電技術機構）・後藤政志・内藤幸雄・長谷川歳恭・平川敬司・三枝 努・秋山 宏・瀧口克己
- 21548 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験（ . PCCV耐震実証試験） その14 補償加振結果と入力評価
内藤幸雄（鹿島建設）・後藤政志・小林俊夫・柴 慶治・服部 靖・秋山 宏・瀧口克己
- 21549 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験（ . PCCV耐震実証試験） その15 試験体の応答性状（復元力特性）
柴 慶治（清水建設）・藤井 誠・田中良三・佐藤修央・服部 靖・秋山 宏・瀧口克己
- 21550 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験（ . PCCV耐震実証試験） その16 試験体の応答性状（共振振動数と減衰定数）
室井一夫（清水建設）・藤井 誠・田中良三・小林俊夫・服部 靖・秋山 宏・瀧口克己
- 21551 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験（ . PCCV耐震実証試験） その17 試験体の破壊性状と耐震裕度
平間敏彦（清水建設）・中島政隆・熊谷仁志・高橋敏夫・服部 靖・秋山 宏・瀧口克己
- 21552 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験（ . PCCV耐震実証試験） その18 裕度試験シミュレーション解析
兼近 稔（鹿島建設）・服部 靖・中島政隆・秋山 宏・佐藤修央・瀧口克己・平間敏彦
- 21553 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験（ . PCCV耐震実証試験） その19 FEM静的弾塑性解析
池田竜介（清水建設）・片山 洋・平間敏彦・小林俊夫・兼近 稔・服部 靖・秋山 宏・瀧口克己
- 21554 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験（ . PCCV耐震実証試験） その20 ライナ評価
三枝 努（石川島播磨重工業）・広田吾一・長谷川歳恭・高橋敏夫・服部 靖・秋山 宏・瀧口克己
- 22036 木質軸組構造の耐力壁に関する実験的研究 その1 青木敦資（日本大大学院）・平山善吉・斉藤俊一・佐藤雅也
- 22037 木質軸組構造の耐力壁に関する実験的研究 その2 佐藤雅也（日本大大学院）・平山善吉・斉藤俊一・青木敦資
- 22130 木質住宅用基礎の水平加力実験 松下克也（ミサワホーム）・岸 明・安達俊夫
- 22208 鋼部材におけるエネルギー遷移温度と形状に関する研究 その1 実験概要
松本由香（横浜国立大）・廣邊琢也・山田 哲・秋山 宏
- 22209 鋼部材におけるエネルギー遷移温度と形状に関する研究 その2 実験結果
廣邊琢也（東京工業大大学院）・松本由香・山田 哲・秋山 宏
- 22233 材端補強した鉄骨柱の塑性変形性能 高橋弘樹（日本大大学院）・中村憲正・戸成建人・半貫敏夫
- 22347 角形鋼管柱 H形鋼梁柱接合部のスカルップによる歪集中の解析
石鍋雄一郎（日本大大学院）・中村憲正・半貫敏夫
- 22412 鋼構造骨組の耐力，変形性能に及ぼす偏心の影響について
安部 剛（日本大大学院）・石渡憲司・高橋弘樹・韓 昶・半貫敏夫
- 23014 崩壊形が異なるRC骨組の材端塑性回転と層間変形の相関を考慮した損傷解析（その1）ファイバー法を用いたRC骨組の静的非線形解析
藤田 敬（日本大大学院）・白井伸明・森泉和人・井上博登
- 23015 崩壊形が異なるRC骨組の材端塑性回転と層間変形の相関を考慮した損傷解析（その2）Push-Overおよび地震応答解析結果を用いた損傷解析
井上博登（日本建設技研）・白井伸明・森泉和人・藤田 敬
- 23083 マクロ要素モデルによるRC柱の繰返し挙動解析 寺沢浩一（日本大大学院）・白井伸明・森泉和人
- 23228 軸筋の付着を除去したRC部材のせん断伝達機構に関する実験的研究（その1 実験概要と実験結果）
浜原正行（日本大）・増田 寛・山本剛史・本岡順二郎・中山 優・飯田誠次郎
- 23229 軸筋の付着を除去したRC部材のせん断伝達機構に関する実験的研究（その2 変形状とひずみ性状に対する考察）
増田 寛（日本大大学院）・中山 優・山本剛史・本岡順二郎・飯田誠次郎・浜原正行
- 23230 軸筋の付着を除去したRC部材のせん断伝達機構に関する実験的研究（その3 せん断ひずみ，最大耐力およびせん断伝達機構に対する考察）
山本剛史（東松山市役所）・中山 優・飯田誠次郎・本岡順二郎・増田 寛・浜原正行
- 23255 軸筋の付着を除去したRC有孔梁の力学的挙動に関する実験的研究 その1 実験概要と実験結果
岡田 満（日本大）・内田龍一郎・飯田誠次郎・末次宏光・舟橋信隆・浜原正行
- 23256 軸筋の付着を除去したRC有孔梁の力学的挙動に関する実験的研究 その2 曲率分布と変形成分
舟橋信隆（日本大大学院）・内田龍一郎・岡田 満・末次宏光・飯田誠次郎・浜原正行
- 23257 軸筋の付着を除去したRC有孔梁の力学的挙動に関する実験的研究 その3 ひずみ性状と終局強度に対する検討
飯田誠次郎（日本大大学院）・内田龍一郎・舟橋信隆・末次宏光・岡田 満・浜原正行
- 23283 RC造袖壁付き柱の耐力評価に関する基礎的研究 その6 片側袖壁付き柱の曲げ耐力評価に関する基礎的研究
岡野守宏（日本大大学院）・清水 泰・高橋 仁
- 23340 コンクリートの水和反応を考慮した数値計算力学モデル 田嶋和樹（日本大大学院）・白井伸明・森泉和人

- 23346 AE波初動の自動確定に基づくAE波形解析とコンクリート微細ひび割れの評価 その1 ウェーブレット変換を用いたノイズ除去とAE波初動の自動確定手法 石田真治(日本大大学院)・白井伸明・森泉和人・森谷 寛
- 23347 AE波初動の自動確定に基づくAE波形解析とコンクリート微細ひび割れの評価 その2 AE源位置標定結果およびモーメントテンソル解析結果 森谷 寛(日本大)・白井伸明・森泉和人・石田真治

環境工学

- 40001 複数スピーカーを用いた拡声時における到来音の音質の変化が音声聴取に与える影響について 橋本 修(日本大)・木村 翔・上原 薫
- 40014 時系列応答が異なる場合に受聴音圧が音に包まれた感じに及ぼす影響 星 和磨(日本大大学院)・羽入敏樹・木村 翔
- 40015 上下方向から到来する反射音が音に包まれた感じに与える影響に関する基礎的検討 佐藤豊成(東京電力)・羽入敏樹・木村 翔・井口雅登・星 和磨
- 40016 上下方向からの反射音を考慮した音に包まれた感じの定量化方法の基礎的検討 井口雅登(日本大大学院)・羽入敏樹・木村 翔・星 和磨・佐藤豊成
- 40024 楽音の特性を考慮した音場の評価方法の検討 楽音特性が実音場における減衰性状に及ぼす影響 小泉由紀(日本大大学院)・関口克明・羽入敏樹・鎌倉貴志・佐竹 康
- 40025 反射音の時系列構造と楽音の時間特性が減衰性状に及ぼす影響 佐竹 康(日本大大学院)・関口克明・羽入敏樹・鎌倉貴志
- 40026 受音点の僅かな違いによる音響指数値の変化の低減方法に関する実験的検討 三浦康雄(日本大大学院)・関口克明・羽入敏樹・鎌倉貴志
- 40027 コンサートホール壁面の列柱状拡散体の音響効果に関する研究 その1. 後壁を介さずに後方反射音を供給する音響的メカニズム 羽入敏樹(日本大)・関口克明・鎌倉貴志・室橋又也・佐藤浩史
- 40028 コンサートホール壁面の列柱状拡散体の音響効果に関する検討 その2. 様々な側壁拡散体との比較 佐藤浩史(日本大大学院)・関口克明・羽入敏樹・鎌倉貴志・室橋又也
- 40029 コンサートホール壁面の列柱状拡散体の音響効果に関する検討 その3. 側壁における円柱状拡散体の詳細な検討 鎌倉貴志(日本大)・関口克明・羽入敏樹・室橋又也・佐藤浩史
- 40030 コンサートホール壁面の列柱状拡散体の音響効果に関する検討 その4. 閉空間における列柱状拡散体の音響効果 室橋又也(若林音響)・関口克明・羽入敏樹・鎌倉貴志・佐藤浩史
- 40036 オープンプラン型小学校における音環境の実態 武田充弘(日本大大学院)・木村 翔・井上勝夫
- 40048 音環境からみた商業空間の分類と特徴《オーナー側からみた商業空間の音環境意識に関する研究(その1)》 奥津京子(森ビル)・木村 翔・荘 美知子・戸塚淳子・明智 都
- 40049 商業空間の空間づくりとイメージの分析《オーナー側からみた商業空間の音環境意識に関する研究(その2)》 戸塚淳子(ナカノ・コーポレーション)・木村 翔・荘 美知子・奥津京子・明智 都
- 40050 商業空間の音環境の重要性に関する利用者意識との比較《オーナー側からみた商業空間の音環境意識に関する研究(その3)》 明智 都(日本大大学院)・木村 翔・荘 美知子・奥津京子・戸塚淳子
- 40054 建築工事作業従事者の長期個人騒音暴露レベルの実態 労働環境騒音の実態と評価に関する研究 その3 宮田央恵(ゾーンプランニング)・木村 翔・荘 美知子・木村英樹
- 40055 建築作業の職種別騒音暴露レベルとリスクに関する研究 労働環境騒音の実態と評価に関する研究 その4 木村英樹(日本大大学院)・木村 翔・荘 美知子
- 40067 有限音線積分法を用いた回折騒音のシミュレーション予測手法に関する基礎的検討 その3. 二重回折の入射条件の違いによる減衰量の検討 坪山 睦(小野測器)・関口克明
- 40083 給水系固体伝搬音の低減効果に関する検討 小林裕昌(フジタ)・木村 翔・井上勝夫・平松友孝・河原塚 透・大川平一郎
- 40108 新標準重量床衝撃源の開発 その1: 衝撃源の概要と実験方法 安岡正人(東京理科大)・中森俊介・富田隆太・木瀬和彦・井上勝夫・橋 秀樹
- 40109 新標準重量床衝撃源の開発 その2: 衝撃源の衝撃力特性 井上勝夫(日本大)・中森俊介・富田隆太・木瀬和彦・橋 秀樹・安岡正人
- 40110 新標準重量床衝撃源の開発 その3: 床衝撃音による検討 平光厚雄(鉄建建設技研)・中森俊介・富田隆太・木瀬和彦・井上勝夫・橋 秀樹・安岡正人
- 40111 成人と高齢者の平坦路歩行時の衝撃力特性 松本裕昭(鉄建建設)・木村 翔・井上勝夫・富田隆太

- 40112 成人と高齢者のスロープ，階段歩行時の歩行特性 富田隆太（日本大大学院）・木村 翔・井上勝夫・松本裕昭
- 40114 重量床衝撃音に対する受音室の室形状の影響に関する研究 床面吸音処理による効果 天井高さの変化と床衝撃音 松澤友貴（日本板硝子環境アメニティ）・木村 翔・井上勝夫・中澤真司
- 40123 乾式二重床の床衝撃音発生系の検討 その1 脚材及び空気層厚が及ぼす影響 中森俊介（日本大大学院）・井上勝夫・木村 翔
- 40124 乾式二重床の床衝撃音発生系の検討 その2 脚間隔及び上部木板層厚の影響 中澤真司（鉄建建設技研）・井上勝夫・木村 翔・中森俊介
- 40125 乾式二重床の床衝撃音発生系の検討 その3 衝撃力伝達特性の検討 山内 崇（戸田建設）・井上勝夫・木村 翔・中森俊介
- 40133 コンクリートスラブ表面処理による軽量床衝撃音の改善方法 福田栄次（栗本鐵工所）・井上勝夫・菊本一高
- 40145 浮き床用ロックウール緩衝材の動的ばね定数，損失係数の振幅依存性に関する検討 平松友孝（大成建設技研）・木村 翔・井上勝夫・大川平一郎
- 40203 ‘街路空間の光環境の在り方’に関する研究 その1 現状の考察及び街路空間における歩行者のストレス 鈴木清久（日本大大学院）・関口克明・角館政英・合田奈緒子・下平裕之
- 40204 ‘街路空間の光環境の在り方’に関する研究 その2 認知によるポイドの特性 下平裕之（日本大大学院）・関口克明・角館政英・合田奈緒子・鈴木清久
- 40205 ‘街路空間の光環境の在り方’に関する研究 その3 まちづくりとしての光環境設備の提言 角館政英（ライト フィールドアーキテクト）・関口克明・合田奈緒子・下平裕之・鈴木清久
- 40436 中国内モンゴルホルチン沙漠における環境適応型住宅の開発に関する研究 その1 中国東北地方の民居と現地建築事情 大沢 匠（O設計事務所）・佐藤柚香・吉野泰子・菅野哲充・関口克明
- 40437 中国内モンゴルホルチン沙漠における環境適応型住宅の開発に関する研究 その2 住居の温熱・空気質・光環境の実態調査結果 吉野泰子（日本大短大）・菅野哲充・関口克明・大沢 匠・佐藤柚香
- 40438 中国内モンゴルホルチン沙漠における環境適応型住宅の開発に関する研究 その3 住居の温熱環境改善に関する提案 菅野哲充（日本大大学院）・吉野泰子・関口克明・大沢 匠・佐藤柚香
- 40439 中国黄土地域におけるヤオトン（窑洞）の環境調査と持続的発展可能な近代化に関する試み その6 冬季窑洞の躯体内温度測定結果 浅見幸子（日本大大学院）・吉田 燦・関口克明・川西利昌・吉野泰子・加藤未佳
- 40440 中国黄土地域におけるヤオトン（窑洞）の環境調査と持続的発展可能な近代化に関する試み その7 ライトシェルフを用いた光環境改善に関する検討 加藤未佳（日本大大学院）・吉田 燦・関口克明・川西利昌・吉野泰子・浅見幸子・太田裕司
- 40441 中国黄土地域におけるヤオトン（窑洞）の環境調査と持続的発展可能な近代化に関する試み その8 窑洞奥部における光ダクトの有効性に関する検討 太田裕司（日本大大学院）・吉田 燦・関口克明・川西利昌・吉野泰子・加藤未佳
- 41496 実験動物施設の環境制御について（第 報 ラットの成長に影響を及ぼさない室温制御手法の検討 その2） 蜂巢浩生（日本大）・吉田 燦・朱宮正剛・古田一也・長谷川雅一・板橋友佳

建築計画

- 5046 自閉症児の教育空間の計画に関する研究 1 情緒障害学級教室の現状分析 白木 力（白木力建築設計室）・野村 歓・関澤勝一・佐藤 平・西島衛治・加藤麻樹
- 5047 自閉症児の教育空間の計画に関する研究 2 自閉症児を考慮した教室空間の構造化について 西島衛治（九州看護福祉大）・野村 歓・関澤勝一・佐藤 平
- 5054 小学校建築における教室空間の評価に関する研究 その1 杉並区立小学校の児童を対象とした調査 田中利行（教育施設研）・長谷川秀一・関澤勝一
- 5055 小学校建築における教室空間の評価に関する研究 その2 杉並区立小学校の教員を対象とした調査 長谷川秀一（日本大大学院）・田中利行・関澤勝一
- 5064 「生活科」の地域環境学習空間の考え方・その1 生活環境の段階的学習領域について 小島聖子（新潟中央ホーム）・宇杉和夫・森 大樹
- 5065 「生活科」における地域環境学習空間の考え方・その2 周辺空間のストラクチャーの学習方法 森 大樹（日本大大学院）・宇杉和夫・小島聖子
- 5071 京都府上京第二十七校及び柳池校の平面計画に関する一考察 山中富士子（フリー）・関澤勝一

- 5102 世田谷区立山野児童館の利用実態調査の意義（地域施設として設計された16年前後の児童館利用実態調査その1） 堀部幸晴（都市計画設計研）・佐藤直樹・関澤勝一・大村虔一
- 5103 世田谷区立山野児童館の遊び空間に対する意識調査（地域施設として設計された16年前後の児童館利用実態調査その2） 佐藤直樹（日本大）・堀部幸晴・関澤勝一・大村虔一
- 5104 世田谷区立山野児童館の行事とその空間の役割（地域施設として設計された16年前後の児童館利用実態調査その3） 三浦幸雄（都市計画設計研）・堀部幸晴・佐藤直樹・関澤勝一・大村虔一
- 5106 川崎市こども文化センターの貸し出し利用について 児童館に関する建築計画的な研究 その1 福住茂久（会計検査院）・渡辺富雄・若色峰郎
- 5142 特別養護老人ホームの複数階化と個室化に関する研究 東京都区部における建設動向調査から 張山成樹（日本大大学院）・石田道孝
- 5155 高齢者関連施設の立地状況について（高齢者関連施設の計画に関する研究 その1） 岩田純明（小山職業能力開発短期大学校）・滝沢雄三・関澤勝一・野村 歓
- 5156 高齢者関連施設の併設状況について（高齢者関連施設の計画に関する研究 その2） 滝沢雄三（小山工業高専）・関澤勝一・野村 歓
- 5202 吊り物機構の利用実態と分析 オペラ上演における舞台空間の使われ方に関する研究（その4） 井上友亮（フリー）・青池佳子・安 星美・佐藤慎也・本杉省三
- 5203 舞台床機構の構成と使われ方について オペラ上演における舞台空間の使われ方に関する研究（その5） 青池佳子（オズ・インターナショナル）・井上友亮・安 星美・佐藤慎也・本杉省三
- 5206 公演時における上演空間の仕込み状況 野外上演施設の現状についての基礎的調査研究（その6） 高波鉄太郎（川崎市役所）・青池佳子・本杉省三
- 5207 楽屋及びバックステージの利用状況 野外上演施設の現状についての基礎的調査研究（その7） 安 星美（日本大大学院）・青池佳子・高波鉄太郎・本杉省三
- 5216 小規模文化施設における運営と利用状況 地域文化施設の利用と文化活動に関する研究（その1） 大橋史人（エムワークス一級建築士事務所）・佐藤慎也・本杉省三
- 5217 小規模文化施設における利用実態 地域文化施設の利用と文化活動に関する研究（その2） 川戸孝容（日本大大学院）・大橋史人・佐藤慎也・本杉省三
- 5218 地域型練習施設における文化団体の日常練習活動について 佐藤慎也（日本大）・本杉省三
- 5236 展示空間に転用された登録文化財の事例調査 建築の機能転用に関する計画的な研究 その2 武田美由紀（フリー）・若色峰郎・渡辺富雄
- 5281 銭湯の新しい動向 墨田区での経営者アンケート調査から 公衆浴場（銭湯）の実態調査研究 岡 淳一（フリー）・若色峰郎・渡辺富雄
- 5500 ビデオ解析手法の信頼性に影響を与える観察者条件に関する研究 ビデオ解析手法による日常生活動作に関する基礎的研究 その5 田中 賢（積水ハウス）・野村 歓・八藤後 猛
- 5519 立ち上がり動作を補助する手すりの基礎的研究（その1） 官能評価による立ち上がり動作解析 國井清照（日本大大学院）・八藤後 猛・堀川博代・野村 歓
- 5520 立ち上がり動作を補助する手すりの基礎的研究（その2） 関節モーメントによる立ち上がり動作解析 八藤後 猛（日本大）・國井清照・堀川博代・野村 歓
- 5570 住宅設備システムにおける利用品質とその応用に関する研究 その1 ISOにおける利用品質の考え方 上野義雪（千葉工業大）・田中 賢・石田道孝・浮貝明雄・渡辺秀俊・菅野泰史・朝妻大貴・柴田卓也
- 5571 住宅設備システムにおける利用品質とその応用に関する研究 その2 利用品質の応用 柴田卓也（千葉工業大大学院）・上野義雪・田中 賢・浮貝明雄・石田道孝・渡辺秀俊・菅野泰史・朝妻大貴
- 5573 西山卯三の受講ノート・講義メモにおける室方位図の検討 武田五一と西山卯三の室方位図の捉え方と住宅計画学形成について（その1） 原 陽介（玉岡設計）・宇杉和夫・紫牟田一魂
- 5574 武田五一の室方位図形成分析について 武田五一と西山卯三の室方位図の捉え方と住宅計画学形成について（その2） 紫牟田一魂（日本大大学院）・宇杉和夫・原 陽介
- 5618 同潤会アパートの囲み型・半囲み型居住空間の形式について アクセスと住戸系パターンとコモン空間の関係 大垣 博（清水建設）・宇杉和夫・紫牟田一魂
- 5738 シルバーピア居住者の居住期間からみた日常生活状況について シルバーピアの居住状況に関する研究（その3） 石川弥栄子（高齢者住宅財団）・村井裕樹・八藤後 猛・野村 歓
- 5757 動作能力別にみた行為度と自立度の改善状況 高齢者・障害者の浴室改造における入浴動作の改善に関する研究（その1） 橋本美芽（横浜市総合リハビリテーションセンター）・村井裕樹・八藤後 猛・野村 歓
- 5758 動作能力別にみた行為度と自立度の関係 高齢者・障害者の浴室改造における入浴動作の改善に関する研究（その2） 村井裕樹（日本大大学院）・橋本美芽・八藤後 猛・野村 歓

都市計画

- 7054 空き店舗対策事業の効果促進に関する研究 田邊雅則(日本大大学院)・今福幸一・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
- 7055 東京都心商業地における空きオフィスの活用可能性に関する研究 その1. レンタルオフィスの実態分析
杉山康隆(日本大大学院)・尾梨斗啓介・小野慎吾・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
- 7056 東京都心商業地における空きオフィスの活用可能性に関する研究 その2. オフィスビル所有者の意識の分析
小野慎吾(日本大大学院)・尾梨斗啓介・杉山康隆・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
- 7145 インターネットを利用した高齢者によるまちづくりへの住民参加の研究 新潟県柏崎市「NET・陽だまり」
をケーススタディとして 遠藤喜彦(大林組)・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也・川島和彦・小池都生乃・海老原啓貴
- 7298 視覚障害者誘導用床材の視認性に関する実態調査 辻 俊光(日本大大学院)・関口克明・吉野泰子
- 7300 地域リハビリテーション・サービスに関わる施設・組織に関する研究 その1 基礎自治体の取り組み
石田道孝(日本大)・加藤 潤
- 7301 地域リハビリテーション・サービスに関わる施設・組織に関する研究 その2 基礎自治体の違いによるサ
ービス施設・組織の問題 加藤 潤(日本大大学院)・石田道孝
- 7471 意味論的都市空間構成の方法とその事例に関する研究 景観都市函館の構成：近代への移行時における意味
構造の継承・置換について 宇杉和夫(日本大)

建築経済・住宅

- 8065 高齢期の生活とリバース・モーゲージ制度に関する調査研究 その1 高齢者の資産状況と意識
藤田正文(日本大大学院)・劉 銑鍾・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
- 8066 高齢期の生活とリバース・モーゲージ制度に関する調査研究 その2 リバース・モーゲージ制度の利用意
向 劉 銑鍾(日本大大学院)・藤田正文・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
- 8090 1995年兵庫県南部地震における東灘区建物の損害額評価 高橋純一(小山工業高専)・加藤裕久・三橋博巳

建築歴史・意匠

- 9036 日本の建築物収集展示施設に関する基礎的研究 民家野外博物館の分類を中心に
早川典子(東京都江戸東京博物館)・片桐正夫
- 9148 母屋桁数の構成と変遷について ベトナム仏教寺院の総合研究 その11
大山亜紀子(日本大大学院)・片桐正夫・重枝 豊
- 9151 石材の連結手法について チャンパ遺跡の実証的研究 その12 重枝 豊(日本大)
- 9154 クメール建築の開口部とその施工技術について(その4)
片桐正夫(日本大)・崔 炳夏・三輪 悟・高橋正時・石津菜央・香川正子・片町 健
- 9155 クメール建築の開口部とその施工技術について(その5) 主祠堂について
崔 炳夏(日本大)・片桐正夫・三輪 悟・高橋正時・石津菜央・香川正子・片町 健
- 9156 クメール建築の開口部とその施工技術について(その6) 副祠堂について
片町 健(日本大大学院)・片桐正夫・崔 炳夏・三輪 悟・高橋正時・石津菜央・香川正子
- 9157 クメール建築の開口部とその施工技術について(その7) 門および塔門について
香川正子(日本大)・片桐正夫・崔 炳夏・三輪 悟・高橋正時・石津菜央・片町 健
- 9182 韓国における歴史的景観の保全に関する史的考察 李 芝海(日本大大学院)・片桐正夫
- 9215 ヘルマン・ムテジウスの書評「日本の住宅」について 田所辰之助(日本大短大)
- 9279 中国の都市風俗図に見る表層領域の研究 私有領域の公有領域への拡張の形態
王 潔(東京大大学院)・大野秀敏・宇杉和夫

15年を振り返って

理工学部長・建築学科教授 小嶋 勝衛

企画経営コースは理工学部建築学科の中にあり、建築学科に入学してくる学生はまずは建築家に憧れてきます。建築学科の専任教員は工学系ばかりですから、そこに法律、経済などの社会科学系の話を持ち込もうとすれば、おのずと非常勤の先生をお願いすることになります。現在、私は理工学部長を務めておりますが、設立準備から関わって、12年間にわたりコース担任を務めさせていただきました。歴代の建築出身の学部長 - 加藤渉先生、木下茂徳先生は企画経営コースの設立、発展に非常にご理解があり、「せっかくお願いするのならば、全国を睨んで最高の人を」と後押しをさせていただいてきました。設立にご尽力いただいた日本大学経済学部の田中啓一先生には社会科学系のできるだけ著名な先生をご紹介いただき、一人ひとりをお訪ねして設立趣旨やカリキュラムの概要をお伝えしたうえで、ご理解いただき、ご協力いただけることとなった先生方により企画経営コースの基礎ができました。専任教員にはカリキュラムの核となる演習科目を担当いただくため、多様な分野をカバーできる三橋先生、石田先生、柳田先生、根上先生にお願いし、平成5年から宇崎崎先生を加えて工学と社会科学が融合した企画書づくりをテーマに独自の指導方法を考案して授業を行っていただいています。また、平成4年からは大学院「不動産科学専攻」が増設され、従来からの「建築学専攻」と合わせて、本コースからの大学院進学が広がっています。

近ごろ、コースの選択動機を学生に尋ねると、「構造力学が苦手だから企画経営をやる」「デザインがどうもうまくいかないからちょっと変わった企画経営に行く」という答えがありました。しかし、このようなネガティブな選択ではなく、工学系の人間が社会科学の考えをしっかりと受け止め、また、工学系から発信するものを社会科学系の人たちに理解してもらう環境を作り出すことが、企画経営コースが研究・教育のフィールドとする「不動産学」の分野を発展させる要因になると考えています。この分野では今もって社会科学系が非常に強い力をもっており、工学系はただモノを作って置くだけという役割を果たしているに過ぎません。この状況を打破するためには相当の力を付けておく必要があります。その第一歩として空間概念をイメージできる、絵に描いて見せる、模型を作って見せることのできる、土地の上に建つ「不動産」をお金や法律で語るのではなく、空間化できる人たちに育ててほしいと願ったのが企画経営コースの始まりとなっています。

この15年間の学生たちの就職先は、建設会社でも設計部や施工ではありません。ほとんどが通常では大学には求人のない都市開発、企画開発部といったところへです。あっという間に第1期生、第2期生たちが入社して10年も経ち、これからが楽しみです。銀行に入った者も面白い活躍をするのではないかと期待しています。15周年はまだ中間報告です。これからもマンネリに陥ることなく、優秀な人材の育成を目指したいと思います。

(企画経営コース15周年記念パーティの挨拶より抜粋)

企画経営コースの現状とその特徴

企画経営コース担任・教授 三橋 博巳

企画経営コースが設立15周年を迎え、15周年記念パーティを開催したことは既報でも報告された(2000年2月16日・東京ガーデンパレスにて開催、『駿建』Vol.27 No.4掲載)。企画経営コースはすでに500名を超える卒業生を擁し、彼らは同窓会を構成するとともに、企画奨励賞の授与などを通して企画経営コースのバックアップをしてくれている。また、大学では3年生前期にコースに分かれるが、企画経営コースでは第一線の実務家、学識者を非常勤に迎えて充実したカリキュラムを構成していると自負している。新カリキュラムとなって若干講義内容にも変更が加えられたが、「工学、法律、経済にも明るい企画・経営・維持・管理に及ぶ総



記念パーティーの様子

合力を持った人材の育成」は普遍的なコースの目標となっており、21世紀にも引き続き社会に求められる人材を輩出できるように努めていく。

なお、この15周年の年に日本不動産学会より日本大学に特別功績賞^{注)}が授与された。これを励みにさらなる発展を目指したいと思う。

今回の特集では企画経営コースを特色付ける科目の概要を簡単に整理し、コースの出身者から思い出と現在の仕事との関連を語ってもらうことで企画経営コースの特色を浮き彫りにしている。

注)平成11年度日本不動産学会賞 特別功績賞

学校法人日本大学(総長 瀬在幸安/理事長 森田賢治)

本大学は日本不動産学会の創設にいち早く呼応して、1985年、理工学部建築学科内に「企画経営コース」を創設し、大学における不動産教育に先鞭をつけ、以来、本年に至るまで不動産を学問的に捉えて勉学する多くの学生を世に送りつづけている。その間、1992年にはわが国初の大学院における不動産に関わる研究・教育の場として「不動産科学専攻」(修士課程)、次いで1994年には博士課程を創設し、博士の学位取得者を輩出するとともに、不動産学を高度にしてかつ専門的な学術の世界に向上、発展させ、当学会の充実に支援・寄与した功績は極めて大である。

1. 企画経営コースの概要

企画経営コースは昭和60年に建築学科の中に設置された(図1)。当初はコース選択の指針となる不動産科学概論を2年生前期、コース選択の面接試験を前期終了時に実施し、コース固有の授業を2年生後期から開始していた。現行の新カリキュラムでは不動産科学概論を2年生後期に移し、面接試験は2年生終了時、3年生からコースの特色となっている授業を受講するようになっている。

企画経営コースの特色となっている授業は、いわゆるB系列と呼ばれるもので、表1に示すように社会科学系の科目が中心であり、通常、建築学を学ぶ者にとって学生時代には出会わないものが多くなっているが、これは「工学、法律、経済にも明るい……」人材を育成するために欠かせないものとなっている。

より実践的に、またプレゼンテーション力を身につけるために充実した演習科目も設置している。不動産企画及び演習 企画設計製図 不動産企画及び演習 卒業企画設計の流れは、3年生前期から卒業までの2年間に継続して演習科目が設置されていることを示しており、自分たちが積極的に頭と体を動かして都市内での開発計画を立案、プレゼンテーション後に質疑応答が求められることから、発表する地図1枚1枚、一字一句すべてに配慮を払わなければならない、計画に対する広範な知恵と深い理解が求められている。

企画経営実習は企画のもとになるデータや情報の収集・整理、統計データの集計・分析、データベースを用

いた情報の検索・整理、図面の作成・表現、プレゼンテーションツールによる発表といった、実践的なパーソナル・コンピュータの利用を実習をとおして身に付けるもので、情報処理のみでなく、情報活用能力を養うものとなっている。

	卒業生数 (不動産科学専攻)	
S60		企画経営コース設立
S61		第1期生コース選択・2年次科目開講
S62	1期生	3年次科目開講
S63	2期生	4年次科目開講
H 1	3期生	48 第1期生卒業/大学院建築学専攻に不動産関連科目開講 カリキュラム改正(卒業企画設計・企画設計製図 新設)
H 2	4期生	49
H 3	5期生	49
H 4	6期生	55 大学院不動産科学専攻設立・修士課程設置 (6) 企画経営コース同窓会設立・第1回総会開催
H 5	7期生	53 第1回企画奨励賞/第2回同窓会 (8) カリキュラム改正(企画経営実習 新設)
H 6	8期生	34 大学院不動産科学専攻に博士後期課程 (4) 設置
H 7	9期生	49 第3回同窓会 (7)
H 8	10期生	24 (2)
H 9	11期生	37 第4回同窓会 (4)
H10	12期生	35 カリキュラム改正 (5)
H11	13期生	33 第5回同窓会 (4)
H12	14期生	15周年記念パーティー開催
	[計]	466

図1 企画経営コース15年のあゆみ

表1 B系列科目(新カリキュラム)

不動産科学概論 / 民法 ・ / 行政法規 / 会計学 / 経済学特論
 ・ / 不動産経営 / 不動産維持管理 / 企画設計製図 / 不動産企
 画及び演習 / 地域開発計画 ・ / 環境システム解析 / 鑑定評
 価理論 ・ / 企画経営実習(必修) / 防災計画 ・ / 不動産
 マーケティング / 不動産企画及び演習 / 不動産特別講義 / 卒
 業企画設計(必修)

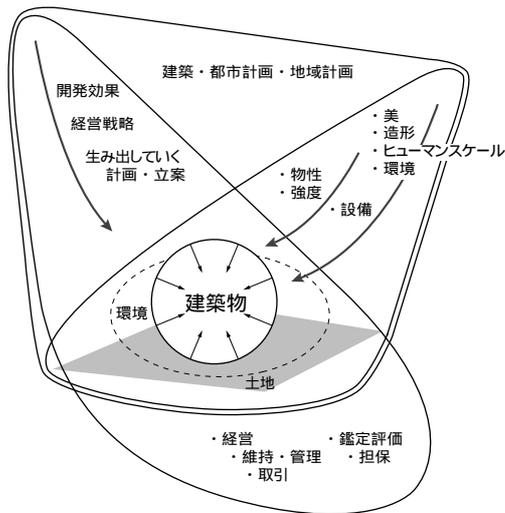


図2 企画経営コースの建築との関連概念図

不動産特別講義は社会で活躍している実務家・学識者による、その時々話題、企画・経営、不動産に関する動向についての90分の講演となっており、多様な分野に関する素養を磨く機会となっている。

企画経営コースの建築との関連は概念図として図2のように示すことができる。

2. 企画経営コースの特徴

次に、企画経営コースの卒業生によるコースの思い出と現在の仕事との関係をまとめてもらった。企画経営コースの特徴をそれぞれの経験に基づいて執筆いただいた。(氏名・現職・卒業年3月卒)

同窓会会長 田村 一徳
 東京都 平成元年卒

企画経営コース15周年おめでとうございます。

時の経つのは早いもので、私たち第1期生のときに始まったこのコースが15年も経つと聞かされると、自分も歳を

とったと今更ながら感じてしまいます。私たち第1期生は、教える先生も教わるわれわれも初めてということで、何もかも手探り状態でアツという間に卒業を迎えてしまったように記憶しています。

さて同窓会のほうは、企画経営コースに遅れること7年、平成4年10月30日に多くの方々の賛同を得て設立総会を行い、産声をあげました。それ以後、今日まで2年に1回のペースで同窓会を行い、現在までに第5回を数えるに至っており、会員は500名を超えるまでになりました。同窓会には毎回、多くの先生方や来賓の方を迎え、会員相互の親睦や先生方との昔話に花を咲かせながら、楽しい一時を過ごしています。しかしながら卒業生が多方面・全国的に散らばっているため、毎回その連絡先の追跡には事務局が大変苦労しています。今回この誌面をご覧になっている方で同窓会の案内が届いていない方は、ぜひとも事務局のほうへ連絡先をご一報下さるようお願いいたします。

また、同窓会は企画経営コースの発展向上のため「企画奨励賞」を設け、優秀な「卒業企画設計」に対して、第5期生を最初として賞状および賞品を授与しています。同窓会は発足してまだ8年と月日が浅く、この程度のことしかできることがありません。しかし、企画経営コースの発展のため、同窓会としましても、微力ながらも協力を惜しまないつもりですので、ぜひとも先生方のご指導と会員の皆様の絶大なご協力を引き続きお願いします。

古川 容子

(財)日本建築センター 評定部防災課 平成2年卒

(財)日本建築センターは、建設省の外郭団体で、新技術の開発成果などの評価調査研究等を主な業務としています。私は、就職してまず「建築技術研究所研究部研究課」に配属になりました。当時はまさにバブル絶頂期で、自治体からの委託研究のコーディネーターとしての業務は山ほどあり、ここで、コンサルタントの方々と共同作業を通して、企画・研究の進め方や考えのまとめ方を勉強させていただきました。平成6年からは評定部防災課に異動し、現在は建築防災計画、建築物の型式認定、住宅の品質確保の促進に関する法律の「火災時の安全に関すること」等について、性能評価、評定の申請に対する事前相談への対応や委員会の運営など、事務局としての業務を担当しています。

業務内容はその時々によって変わってきていますが、この職場にいて最も魅力的なのは、建築業界の最新情報が常に身近に入ってくることです。しかしながら建築センターは、それらを外部に発信する役目も同時に担っている立場にあり、新しい法律や技術を素早く咀嚼して吸収する能力が求められます。

大学生活で大切なのは、知識をどれだけ身につけられるか、ではなく、知識を身につけるための基本的能力を、どれだけ育むことができるか、ではないかと思えます。企画経営コースで先生や同輩たちと議論しながらひとつの企画をまとめ上げる経験を積んだことは、就職直後から現在に至るまで、私の中で、建築センターでの業務をこなしていく上での基盤となってくれていると実感しています。

最後になりましたが、15周年おめでとうございます。今後ますますのご発展をお祈り申し上げます。

高橋 聖

日本大学理工学部 平成3年卒

私は現在、理工学部電子工学科（平成13年4月より電子情報工学科に名称変更）に助手として勤務しています。卒業生の多くが都市開発や建築関係の仕事に従事しておられるのを見ると、相当に異質な存在であるといえます。しかし、企画経営コースで学んだことは、今の私の仕事である研究や学生の指導にも確実に生かされています。そのひとつが卒業研究です。自らの設定した問題を調査あるいは実験によって分析し、その解決方法を明らかにするという過程は、工学のどの分野についても重要なものです。二つ目はプレゼンテーションの仕方です。私の受けた「企画及び演習」の授業では、都市再開発の演習課題に対し毎週のように発表を行いました。図や模型など視覚的なメディアを使い、自分の考えを正確にわかりやすく伝える訓練は、私自身の研究生活や国際会議をはじめとする研究発表の場でも大いに役立っています。

さて、建築学科には企画経営と建築学の2つのコースがあります。これらのコースをソフトウェアとハードウェアの観点から眺めてみると、企画経営コースをソフトウェアに、建築学コースをハードウェアに対応させることができると思えます。電子情報工学の分野でも、ソフトウェアとハードウェアの連携はとても大切です。身近なコンピュータシステムを例にとると、ハードウェアだけがあっても、それを制御するためのソフトウェアがなくてはシステムとして機能しません。反対にハードウェアがなくては、実際のものであるシステムの実現はできず、またハードウェアの仕組みを理解しなくては、その能力を十分に生かすことはできません。これと同じように、建築物というハードウェアをもとに、どのような仕組みで街や都市をつくっていくかというソフトウェアが組み合わさって、初めてすばらしい空間が生み出されるのだと思います。企画経営、建築学のどちらのコースで学ぶにしても、お互いの内容を深く理解し、連携していくことの大切さを企画経営コースが誕生して15年を迎えた今、再確認したいところです。

小原 浩武

鹿島建設㈱ 平成4年卒

建築学科を卒業すると設計や施工の業務に携わる人が多いと思いますが、私はゼネコンの開発部門で開発事業に携わっています。開発事業とはどのようなものかという点、オフィスや商業施設、マンションなどの収益施設を建設し、それを賃貸または売却することで収益を上げる事業です。事業の種類は多様で、エリアにより駅前で大規模な再開発事業を行うこともありますし、地方でリゾート施設を手がけることもあります。

開発事業は幅広い知識が必要です。土地取得のための不動産の知識や、事業を成立させ施設を運営していくための経営・経理・税制的な知識などです。当然、開発事業は1人で行うことはないのですべての知識を専門的に習得する必要はないのですが、事業を実施する上での最低限の知識は必要となります。私はその基礎知識を企画経営コースで学びました。

卒業して感じたことは、企画経営コースのカリキュラムは大変実践に即しているということです。在学中は、建築学科なのに法律や経済をなぜ学ぶのかと不思議に思いましたが、それは企画経営コースの「工学、法律、経済にも明るい企画・経営・維持・管理に及び総合力を持った人材の育成」という設立趣旨にそったカリキュラムとなっているからです。

バブル経済崩壊後、不動産事業はもうだめだのような言われ方をしてきました。しかし、一部の勝ち組みといわれる企業では、人員のリストラや不良債権処理が順調に進み、新しい事業展開を図ろうとしています。また、建設・不動産業以外でもIT革命の先端にいる新規参入企業等は、事業の拡大を図るため積極的に事業用地を求めています。そしてこれらの企業は何れも不動産や建築的な知識をもった人材を必要としています。

今後、企画経営コースは建築や不動産の分野にかかわらず、その可能性を求めてすべての分野に目を向ける必要があるのではないのでしょうか。企画経営コースが設立してから15年が経ちますが、今後は設立時とは違った形で社会から人材の必要性が求められるような気がします。

田村 裕希

ATELIERあしたば（一級建築士事務所）
㈱東京ランドスケープ研究所 嘱託勤務 平成6年卒

大学2年のコース選択時には、まだ自分の中ではっきりとした方向性は定まっていなかったのですが、最終的に建築設計をするにしても、一度都市全体の仕組みをとらえたいと考えておりましたので「デザインのできるプランナーを育て

る。知識と共に知恵を使い計画する。」などをモットーとする企画経営コースに興味を覚えたものです。

それまでの課題は、あるビルディングタイプと敷地を提示されただけで設計を始めていたのですが、「なぜその設計をするのか」と、設計背景まで含んだ企画経営コースの課題の出され方は、リアリティがあり新鮮だったことを覚えています。設計をデザインイメージから始めるのではなく、まず土地の与条件、そこに発生する需要、コスト等をトータルに眺める「くせ」はその時期に叩き込まれた気がします。

卒業後、建築ではなくランドスケープの分野に就職し、都市公園・自然公園・建築外構・街路・イベント会場等の設計に関わらせていただいておりますが、各プロジェクトによって立地条件・要求事項等がまったく異なるため、必ず最初の段階では多方向からの検討が必要となります。その場所に望まれるのは、空間利用促進なのか、自然保護なのか、何かを引き立てる空間なのかなど、常に柔軟性をもって設計の立場・方向性を絞っていくことが望まれます。その結果、物として見えてこない設計というのも多々ありますが、そこが建築設計とは違った概念なのではないかと感じています。

ランドスケープという隣の分野ではありますが、企画経営コースで学んだトータルな計画手法は各場面で役立っており、分野の違いを超えたプランニングの基本を社会に出てから再認識している状況です。

池末 宏行

（総研 評価コンサルタントグループ 鑑定担当 平成7年卒）

「あっ、あの顔は……」、シドニーオリンピックで盛り上がった9月、テレビでは見たことのある顔がよく映っていた。「不動産維持管理」の講義でお世話になった八木先生である。学生当時は、「あのおっちゃん」(大変失礼ではありますが)程度の感覚だったが、社会人になって、年齢を重ねるたびにすごい方々に教わってたんだなーと、反省しきりです。

現在の仕事は、不動産の鑑定評価に携わっていますが、クライアントに内容説明に行くたびに思い出すが、「企画及び演習」の授業。先生方を前にプレゼンするんですが、小嶋先生の一挙手一投足にドキドキしてた覚えが。発表しながら、「先生、めがねかんじゃないよ」「首かしげてるよ」と表情をチェックし、どんな質疑がくるか、それにどう答えるか、考えを巡らせ……。その経験はすごい財産だと思っています。

今の仕事の内容は、物納財産売払いのための調査・評価、公共用地取得のための評価、建物の知識が特に必要となる評価、競売等を担当しています。公共団体からの依頼が中心ですので、現場でトラブルはないんですが、一番大変なのは競

売の現地調査です。まだ、恐い人たちが居付いていた、ということはありませんが、「娘にだまされた」とかいつてるお婆さんの愚痴を延々と聞いたり、「何で価値のない土地に銀行は金をこんなに貸すんだ」とか逆に説教されたりしています。また、固定資産税課税のため、町内全部の建物を2年かけてチェックしてまわるなど、単なる鑑定士事務所ではできないこともでき、有意義に過ごさせてもらっています。

現在は、鑑定士になるため3次試験(11/26)に向けて勉強するかたわら、不動産鑑定士補・一級建築士として宅建の法定講習の講師もやらせていただけるようになりました。

まだまだ、建設・不動産業界とも厳しい時代が続きますが、自己の研鑽に努め、皆様のご指導を仰ぎながら、企画経営コース卒業生として頑張っていきたいと考えています。

谷澤 賢

千葉市都市局建築部保全課 平成7年卒

私は7期生ということで、学生が一巡以上して、コースとしては安定しはじめた時期に在籍していました。当時の印象としては、学科としての授業とコースとしての授業が時間的に半々であり、なおかつ授業の内容も当然のことながら分野が異なっていたので、2つのクラスを掛け持ちしていたような感じがしていました。また、現在でもあまり変わらないとは思いますが、私立大学としては珍しく学生数が50人以下であったので、授業中に先生方と学生の距離が近かったことはよかったように思います。

ところで、私は地方自治体において営繕関係の仕事を行っています。営繕関係の仕事は、用地の取得といった業務はありませんが、建物の設計、建設、維持・管理、解体といった一連の業務を行い、建物を不動産として扱っているのは民間企業と同じです。近年においては、建物建設後の維持・管理に関する問題が、市有建築物のストック増大や景気の低迷による財政難等により、非常に重要な課題となってきており、どの自治体においても企画経営コース出身者のような人材がますます必要となってきていると考えています。また今後におきましても、PFIの導入などを契機として、建物を経営するといった視点から公共施設の企画・運営をしていく必要性がより重大性を増し、不動産経営に関する知識を併せ持った人材が自治体にも必要になってくると考えられます。

最後になりましたが、先生方には今後とも建物の企画経営に関わる知識を豊富にもった学生を社会へ送り出していきたいと思っています。また、学生の皆さんには、企画経営コースで学んだ知識が、地方自治体においてもますます重要となってきておりますので、ぜひチャレンジしていただきたいと思っています。

駿河台シティキャンパス博【建築編】 10年ひと昔



日ごとに寒さが忍び寄り、ようやく過ごしやすくなってきた11月3日、「駿河台シティキャンパス博」が行われました。これは年に数回、高校生や受験生を対象にして、とは何ぞやということから理工学部 学科の紹介やキャンパスの紹介、進学相談までを行っている学部主催のイベントのひとつです。

シティキャンパス博では、各学科に先生と学生1名ずつによる相談窓口と進学相談コーナーを設けて、高校生や受験生の質問疑問に答えています。当日、生徒たちは、開始の30分前から集まり始め、731教室で行われたオリエンテーションを受けてから、各学科の相談窓口のある921教室に移動して、熱心に質問疑問を投げかけていました。相談窓口はあっという間に順番待ちの列ができるほどで、それまで閑散としていた921教室は一気に活気を帯びて、高校生や受験生119名の気合と彼らに負けず劣らず熱心だった20名ほどの父母の真剣さで溢れていました。

当日は新しい1号館模型とパースの展示も行われ、彼らは興味深く眺めていました。そこでの建築関係者らしい父親と息子の会話……、父「建築に入ればこういうことができるんだぞ」、子「えー！ほんとかよー！」。まあ詳細はこの際無視して……、なんだかこんなに素朴な感嘆符付きの言葉を聞いて、ちょっと忘れそうになっていた約10年前のまだ高校生だった頃の気持ちが思い出されて、これもまた高校生の頃のように、勉強しなくちゃ！と思う1日なのでした。

(佐藤直樹記)

岡田章専任講師に 理工学部学術賞(教育・技術部門)

毎年テーマを決めて学生から計画案を募り、入賞作品が選出されると、それを学生の手で実際に組み立てて学部祭を含む期間、船橋キャンパスに展示するというたいへんユニークな「体験的建築教育」の試みに対して、本年度の理工学部学術賞が贈られた。



1993年に斎藤研究室が中心となって始められたこの「習志野ドーム」プロジェクトは、翌年から計画案を学生から公募する方式に発展、年を追うごとに参加学生の輪が広がって斬新なアイデアのドーム空間が次々と船橋キャンパスに具現化

し、習志野祭の話題をさらった。1996年にはこの教育成果の一部が国際シェル・空間構造学会(IASS)で斎藤、岡田両先生によって紹介され、たいへんな評判になってその年のIASS論文賞を受賞した。その他、日本建築センター発行の「つどいの空間 ドーム建築のデザインと技術」にも取り上げられるなど、ひとつの建築教育手法として社会に認知されるまでに至っている。

このプロジェクトに参加した学生は建築学科のみにとどまらず、海洋建築工学科、短期大学部建設学科、芸術学部、生産工学部からも参加し、学生間の交流を活発化させる一助となっている。これまでに船橋キャンパスに建設された学生たちのアイデア作品は8年間で31種類、40個にのぼる。いずれもなかなかの力作ぞろいで、近未来のテクノロジーを指向する開発テーマに結びついたアイデアも随所に見られたという。

発案者の斎藤公男教授、今日までに育て上げた岡田章専任講師の強烈なエネルギーとリーダーシップ、このプロジェクトに積極的に参加し、手づくり建築の楽しみを知って巣立ったたくさんの学生諸君にエールをおくりたい。

建築学科スポーツ大会



今年の秋はことわざ通り、アテにならない日が多かったようですが、11月11日は快晴でした。

朝、10時に船橋キャンパスのグラウンドに勢ぞろいした建築学科の学生、教員を前に、教室主任の斎藤公男先生が力強い開会挨拶をして、9チーム、約150名が参加した建築学科スポーツ大会が開幕しました。

3個所のグラウンドに分かれてトーナメント方式で競われたソフトボール大会の優勝者は2年生チーム、昨年に続く連続優勝という快挙でした。注目の教員チームは6位入賞、じつは構造系院生チームとの6位決定戦は両方もスタミナ切れで試合が成立しなかったため、両者とも同率で6位ということに落ち着いたのです。

幸いけが人もなく、快晴の1日をスポーツで汗を流したあと、ファラデーホールの懇親会でのビールがおいしかったこと。パッカス神に感謝の1日でもありました。



Cu-ronの家
てんせぼし
KUNE-KUNE
メビウスの波
森のシザーズ

Narashino Dome NU 建築フォーラム

今年で8回目を迎える「習志野ドーム」が、造林過程に生じる副産物である間伐材の有効利用をテーマに行われた。直径100mm、長さ3m以内の丸太を利用したテンポラリースペースの提案として、学科1年生をはじめ海洋建築工学科の学生などから全41作品がコンペに提出され、斎藤公男教授、今村雅樹助教授、岡田章専任講師、佐藤慎也助手、佐藤直樹助手らによって行われた審査により、6作品が実際に建設されることとなった。

事前に「ドームの会」の学生たちを中心にディテールや施工計画等を考えながら、手づくりで丸太の加工や膜の製作が行われ、11月2、3日の2日間にわたり、人力施工による建方が行われた。

当日はあいにくの雨の中での作業となったが、学生たちの手で次々と魅力ある作品が船橋キャンパスに出来上がった。

体験記 1

星野 雅大 (M-1)

「習志野ドーム」は、模型規模から実大規模へと置換したときに、いかにして実現させるかが面白いところである。しかし、面白い反面、少しのミスが命取りになるということも、今年の「習志野ドーム」では痛烈に感じた。

事前準備の際、規模が小さい模型では無視できる誤差も、実大規模ではそうはいかない。実際、丸太を角度30°に切断することも容易ではなかった。

建方当日は、それぞれの作品もそうだが、自分の担当の「森のシザーズ」が無事に建つかどうか心配で、それを打ち消すためには、今までやってきたことに自信をもつほかはなかった。しかし、「森のシザーズ」は建設途中に危険という理由から、急遽、形を変えて

建てられた。「森のシザーズ」の建方が一時中断したとき、なんともいえない気持ちになり、思わず涙が溢れてきた。作品が残せないことよりも、自分の甘さや弱さに腹立たしくなり、悔しさでいっぱいだった。

しかし、今、改めて考えると、他の人よりもよい経験ができた。コンピュータによる解析だけでなく、自分の頭で考える必要性といったものを、このイベントを通じて感じ、学んだ。創る楽しさ・つらさを体験できるのが習志野ドームである。今年参加していない人もぜひ来年は参加して、この体験を味わってほしいと思う。

体験記 2

鈴木 俊勝 (M-2)

私が担当した「Cu-ronの家」は、高さ約5mもあ

り、それをクレーンを用いずに、学生たちの力だけでいかに施工するかというのが課題でした。

当日は、大雨のため作業が進まず、予定よりもかなり進行が遅れましたが、学生たちのやる気のおかげで、少しずつ形が出来上がり、どうにか無事に完成することができました。そのなかでも、もっともありがたかったことは、随時の施工手順変更にもかかわらず、みんながそれを理解してくれ、さらには、自分たちがより作りやすくなるような意見を出してくれたことです。みんなの力を合わせて作り上げる習志野ド

ムは、その時、その場で最善の方法を考え、施工していかなければなりません。みんなの声を聞き、それを一つの形にすることができて、本当によかったと思います。

ものづくりは大変なことかもしれませんが、それに参加することにより得たものは、立場や作品にかかわらず、とても素晴らしいものであると思います。これからは習志野ドームでは、また更なる違った感動や素晴らしい経験を与えてくれると思います。

竹内悦男氏、蛭川寿氏、松岡三郎氏、山田哲氏、松本由香氏、秋山宏教授連名の原著論文「実大振動台実験による柱梁溶接接合部のフラクトグラフィ」が日本建築学会構造系論文集No.533(2000年7月号)に掲載された。

大学院不動産科学専攻OB吉澤光三君、小嶋勝衛教授、根上彰生助教授、宇於崎勝也専任講師連名の原著論文「地価形成要因に関する実証的研究 宇都宮市の郊外路線商業地域を対象として」が都市計画226号(Vol.49, No.3, 2000年8月)に掲載された。

竹内徹氏、柴田正樹氏、金田勝徳氏、岩田衛氏、和田章氏、斎藤公男教授連名の原著論文「テンション材用粘弾性減衰機構の実験的研究」が日本建築学会構造系論文集No.534(2000年8月号)に掲載された。

大学院建築学専攻OB田中賢君、八藤後毅助手、野村歆教授連名の原著論文「ビデオ解析法の信頼性に影響を与える観察者条件・観察内容条件に関する研究 ビデオ解析法による動作解析に関する基礎的研究第2報」が日本建築学会計画系論文集No.535(2000年9月号)に掲載された。

大学院不動産科学専攻博士後期課程3年の劉銑鍾君、小嶋勝衛教授、根上彰生助教授、宇於崎勝也専任講師連名の原著論文「リバース・モーゲージ制度が高齢者世帯に与える影響に関する研究」が日本建築学会

教室ぶろむなード

計画系論文集No.535(2000年9月号)に掲載された。

楊志勇氏、秋山宏教授連名の原著論文「エネルギーの授受に基づく相互作用の効果に対する評価」が日本建築学会構造系論文集No.536(2000年10月号)に掲載された。

大学院不動産科学専攻OB(現在、理工学研究所研究生)川島和彦君、小嶋勝衛教授、根上彰生助教授、宇於崎勝也専任講師連名の原著論文「街並み景観整備による建築更新の誘導効果に関する研究 北海道小樽市を対象として」が日本建築学会計画系論文集No.537(2000年11月号)に掲載された。

11月25日に行われた理工学部学術講演会懇親会において、本年度の学会・協会賞受賞者が紹介された。教室関係では今村雅樹助教授の日本建築家協会新人賞、井上勝夫教授の日本建築学会賞(論文賞)の受賞が紹介された。OBでは、東京電機大学今川憲英教授のIASS Tsuboi Award、(株)梅沢建築構造研究所梅沢良三氏の松井源吾賞、(株)構造計画プラス・ワン金田勝徳氏の松井源吾賞、(株)大林組技術研究所渡辺充敏氏の日本建築学会奨励賞の受賞がそれぞれ

紹介された。

一昨年より開催されている「NU建築フォーラム」は、学生とOBとの交流を目的として、建築教室が主催しているフォーラムである。6月30日(金)には、船橋校舎において建築家・日比生寛史氏(1985年、生産工卒)を講師に、「建築のデモクラシーとバランス R・ロジャーズパートナーシップのチームによる建築論」と題する刺激的な内容の第4回講演会が開催された。また、11月17日(金)には会場を駿河台校舎に移し、2000年度の新日本建築家協会(JIA)新人賞を受賞した建築家の椎名英三氏(1967年、理工卒)による第5回講演会「YES 建築」が行われた。2時間にわたりスライドを中心に、建築に対する熱い想いを伝えるトークが901会場内に広がった。2000年最後の企画となった第6回は、松井源吾賞を受賞した金田勝徳氏(1968年、理工卒)と梅沢良三氏(1968年、理工卒)による合同講演会「私と建築デザイン」で、構造デザイン界における本学出身者の活躍ぶりが強く印象付けられた講演会となった。いずれの講演会とも、終了後は会場を学生食堂に移し、学生とOBとの間での和やかな交流・懇談が行われた。なお、21世紀最初の「NUフォーラム」は、1月26日(金)に高宮真介教授による「理工学部(新)1号館の建築デザインについて」を開催する。

駿建目次

(2000.11 Vol.28 No.3 通巻111号)

エコファミリーハウス 国際設計コンペ最優秀賞を受賞して	2	企画経営コース設立15周年特別企画 15年を振り返って ほか	13
中原英隆「C' mon sense」展開催	4	駿河台シティキャンパス博 建築編 / 岡田章専任講師に理工学部学術賞	18
私と建築	5	Narashino Dome	19
2000年度日本建築学会大会(東北) 建築学科教室関係者発表論文リスト	6	教室ぶろむなード	20

『駿建』 発行者・斎藤公男：千代田区神田駿河台1-8 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724 <http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>
平成12年度編集委員：半貫敏夫・岡田 章・大川三雄・蜂巣浩生・羽入敏樹・佐藤慎也・佐藤直樹 印刷：奥村印刷(株)

り、それをクレーンを用いずに、学生たちの力だけでいかに施工するかというのが課題でした。

当日は、大雨のため作業が進まず、予定よりもかなり進行が遅れましたが、学生たちのやる気のおかげで、少しずつ形が出来上がり、どうにか無事に完成することができました。そのなかでも、もっともありがたかったことは、随時の施工手順変更にもかかわらず、みんながそれを理解してくれ、さらには、自分たちがより作りやすくなるような意見を出してくれたことです。みんなの力を合わせて作り上げる習志野ド

ムは、その時、その場で最善の方法を考え、施工していかなければなりません。みんなの声を聞き、それを一つの形にすることができて、本当によかったと思います。

ものづくりは大変なことかもしれませんが、それに参加することにより得たものは、立場や作品にかかわらず、とても素晴らしいものであると思います。これからも習志野ドームでは、また更なる違った感動や素晴らしい経験を与えてくれると思います。

竹内悦男氏、蛭川寿氏、松岡三郎氏、山田哲氏、松本由香氏、**秋山宏教授**連名の原著論文「実大振動台実験による柱梁溶接接合部のフラクトグラフィ」が日本建築学会構造系論文集No.533(2000年7月号)に掲載された。

大学院不動産科学専攻OB **吉澤光三君**、**小嶋勝衛教授**、**根上彰生助教授**、**宇於崎勝也専任講師**連名の原著論文「地価形成要因に関する実証的研究 宇都宮市の郊外路線商業地域を対象として」が都市計画226号(Vol.49, No.3, 2000年8月)に掲載された。

竹内徹氏、柴田正樹氏、金田勝徳氏、岩田衛氏、和田章氏、**斎藤公男教授**連名の原著論文「テンション材用粘弾性減衰機構の実験的研究」が日本建築学会構造系論文集No.534(2000年8月号)に掲載された。

大学院建築学専攻OB **田中賢君**、**八藤後毅助手**、**野村歆教授**連名の原著論文「ビデオ解析法の信頼性に影響を与える観察者条件・観察内容条件に関する研究 ビデオ解析法による動作解析に関する基礎的研究第2報」が日本建築学会計画系論文集No.535(2000年9月号)に掲載された。

大学院不動産科学専攻博士後期課程3年の**劉銃鍾君**、**小嶋勝衛教授**、**根上彰生助教授**、**宇於崎勝也専任講師**連名の原著論文「リバース・モーゲージ制度が高齢者世帯に与える影響に関する研究」が日本建築学会

教室ぶろむなード

計画系論文集No.535(2000年9月号)に掲載された。

楊志勇氏、**秋山宏教授**連名の原著論文「エネルギーの授受に基づく相互作用の効果に対する評価」が日本建築学会構造系論文集No.536(2000年10月号)に掲載された。

大学院不動産科学専攻OB(現在、理工学研究所研究生) **川島和彦君**、**小嶋勝衛教授**、**根上彰生助教授**、**宇於崎勝也専任講師**連名の原著論文「街並み景観整備による建築更新の誘導効果に関する研究 北海道小樽市を対象として」が日本建築学会計画系論文集No.537(2000年11月号)に掲載された。

11月25日に行われた理工学部学術講演会懇親会において、本年度の学会・協会賞受賞者が紹介された。教室関係では**今村雅樹助教授**の日本建築家協会新人賞、**井上勝夫教授**の日本建築学会賞(論文賞)の受賞が紹介された。OBでは、東京電機大学**今川憲英教授**のIASS Tsuboi Award、(株)梅沢建築構造研究所**梅沢良三氏**の松井源吾賞、(株)構造計画プラス・ワン**金田勝徳氏**の松井源吾賞、(株)大林組技術研究所**渡辺充敏氏**の日本建築学会奨励賞の受賞がそれぞれ

紹介された。

一昨年より開催されている「NU建築フォーラム」は、学生とOBとの交流を目的として、建築教室が主催しているフォーラムである。6月30日(金)には、船橋校舎において建築家・日比生寛史氏(1985年、生産工卒)を講師に、「建築のデモクラシーとバランス R・ロジャーズパートナーシップのチームによる建築論」と題する刺激的な内容の第4回講演会が開催された。また、11月17日(金)には会場を駿河台校舎に移し、2000年度の新日本建築家協会(JIA)新人賞を受賞した建築家の**椎名英三氏**(1967年、理工卒)による第5回講演会「YES 建築」が行われた。2時間にわたりスライドを中心に、建築に対する熱い想いを伝えるトークが901会場内に広がった。2000年最後の企画となった第6回は、松井源吾賞を受賞した**金田勝徳氏**(1968年、理工卒)と**梅沢良三氏**(1968年、理工卒)による合同講演会「私と建築デザイン」で、構造デザイン界における本学出身者の活躍ぶりが強く印象付けられた講演会となった。いずれの講演会とも、終了後は会場を学生食堂に移し、学生とOBとの間での和やかな交流・懇談が行われた。なお、21世紀最初の「NUフォーラム」は、1月26日(金)に**高宮真介教授**による「理工学部(新)1号館の建築デザインについて」を開催する。

駿建目次

(2000.11 Vol.28 No.3 通巻111号)

エコファミリーハウス 国際設計コンペ最優秀賞を受賞して	2	企画経営コース設立15周年特別企画 15年を振り返って ほか	13
中原英隆「C' mon sense」展開催	4	駿河台シティキャンパス博 建築編 / 岡田章専任講師に理工学部学術賞	18
私と建築	5	Narashino Dome	19
2000年度日本建築学会大会(東北) 建築学科教室関係者発表論文リスト	6	教室ぶろむなード	20

『駿建』 発行者・斎藤公男：千代田区神田駿河台1-8 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724 <http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>
平成12年度編集委員：半貫敏夫・岡田 章・大川三雄・蜂巣浩生・羽入敏樹・佐藤慎也・佐藤直樹 印刷：奥村印刷(株)